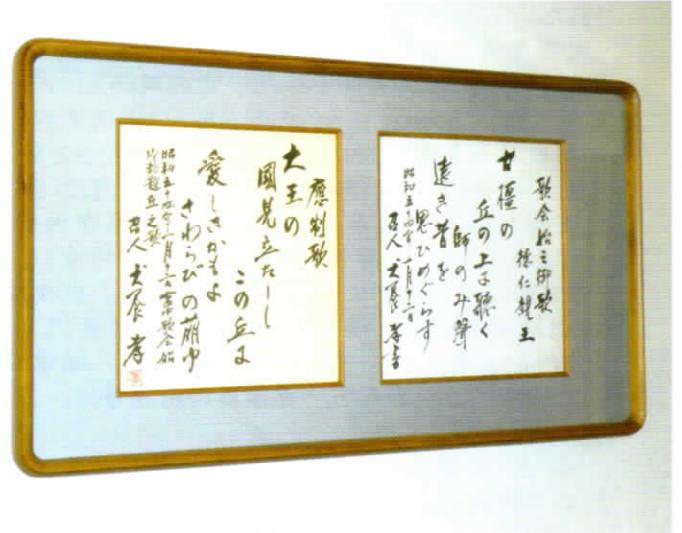


# 初恋を思うべし

南都明日香ふれあいセンター犬養万葉記念館

NO.8 (2018年9月9日号)

次の天皇に即位される徳仁皇太子殿下が、学習院中高の修学旅行で明日香村を訪問された時、犬養先生がご案内をされました。後にその時の思い出を短歌でご披露されたのは、犬養先生が召人としてお招きを受けられた新年の歌会始の機会でした。(昭和天皇にも甘樫丘で犬養先生がご説明をされています。)その時のお二人の歌を、記念館の入り口に誇らしく掲げております。新天皇の貴重なお歌です。そして「平成」もいよいよ次の時代にバトンタッチされますが、「平成おじさん」と言われた小淵恵三前総理大臣は、明日香村議員連盟のおひとりで村に縁も深く、確か村長室に小淵さん揮毫の書額がかけられていました。犬養孝先生の大ファンであった小淵さんは、犬養万葉記念館の開館記念の平成12年4月1日に立派な花輪を贈って下さいました。ご厚意に感謝する間もなく翌日、脳梗塞で倒れられたのでした。忘れられない残念な出来事でした。今年は犬養先生の逝去から満20年です。



## 記念館歳時記



猿石が記念館に!

4月に行われたEロータリークラブの盲人の方のチャリティウォークで、特別に「猿石」が配置され、触って楽しんでいただきました。



少しずつ増えた万葉植物。今年は「かんぞう」(忘れ草)を植えてみました。開花は来年になりそうです。「恋の憂さ」を忘れたい方に間に合いますように。



今年の猛暑で、記念館でも「かき氷」をメニューに加えました。ふわふわ氷ブームの奈良ですが、昔ながらのシンプルなかき氷。暑さをしのぎます!

## 犬養先生の碑



今年は大伴家持の生誕1300年。岡本館長の地元、西宮市の西田公園の萬葉植物園に家持の歌の碑があります。

④春の園 紅にほふ 桃の花下  
照る道に 出で立つおとめ  
(巻19-4139)

## これからの予定

- 9月16日(日)・12月16日(日) チコンキ・カフェ
- 9月16日(日) 万葉植物野外講座 ※小山バス停 10時集合
- 9月17日(月・祝) 第16回 万葉の歌音楽祭 ※石舞台公園にて
- 11月4日(日) 「犬養先生を語る～没後20年」 山内英正氏
- 12月2日(日) 特別館長講座「万葉うたがたりコンサート」
- 毎月1回: 館長万葉講座・なつかしの童謡唱歌カルチャー

※詳細については記念館にお問い合わせください。



昭和天皇は昭和50年代、奈良県に3度行幸されている。1度目は昭和54(1979)年12月3～5日に地方事情の視察として、2度目は昭和56年5月23～24日に第32回全国植樹祭臨場、3度目は昭和59年10月11～13日に第39回国民体育大会臨場のためである。1度目の行幸出発はこの年の10月30日に予定されていたが、与党内部で「四十日抗争」が起こったため、この日に特別国会が召集されることになり12月3日に延期された。

犬養孝先生が甘樫丘で天皇に進講したのは、1度目の昭和54年12月4日であった。この時のエピソードと後日談については、先生からの聞き書きに1次史料の『入江相政日記』などを付き合わせ、「犬養先生と飛鳥③・④」で紹介したことがある。平成30年3月に『昭和天皇実録』の第十七巻・第十八巻が東京書籍から漸く刊行されたので、犬養先生に関わる記事を検索してみた。この実録は1次史料に基づく編纂書であり、戦後編に対しては戦中編ほど、歴史研究者の関心は高くない。何がどのように書かれ、書かれなかったのか、編者の意図を汲み取りながら読んだ。甘樫丘の出来事は、次のように記されている。

四日 火曜日 午前九時、御宿泊所を天皇お一方にて御出発になり、高市郡明日香村にある国営飛鳥歴史公園の甘樫丘に向かわれる。御到着後、建設省近畿地方建設局長渡辺修白より飛鳥歴史公園の概要をお聞きになり、ついて御料ジープにて甘樫丘の頂上へ移動される。展望台において大阪大学名誉教授犬養孝より、持統天皇御製を始め万葉集歌の朗詠を交えた説明を受けられつつ、西方の金剛・葛城の峰々や大津皇子墓のある二上山、北方の藤原宮跡・天香久山、東方の三輪山・飛鳥板蓋宮伝承地・大原の里 藤原鎌足生誕の地等を御展望になる。なおこの御展望につき次の御製あり。

丘に立ち歌をききつつ遠つおやのしろしめしたる世を  
しのびぬ

明日香村中央公民館において御少憩後、高松塚古墳に御到着になる。…(後略)…

特に目新しい事実はないが、この日の天皇のために造られた登り坂を、専用車からジープに乗り換えて登頂したことが分かる。進講した万葉歌の事例として、持統天皇御製(「春過ぎて 夏来らし 白たへの 衣干したり 天の香具山」巻1-28)のみを挙げている。

入江侍従長は天皇と犬養先生に配慮して、2人から少し離れた位置で講話を聴いていた。その時の思い出を次のように記している。

昭和五十四年に、天皇陛下は、甘樫丘の上にお立ちになり、なんと万葉集の心臓部に於いて犬養孝博士の話をお聞きになった。その日、飛鳥の空は晴れわたり、博士の歌い上げられる節調につれて、すべての野、すべての森、また遠く山々までが、千三百年前のいのちに生きたのである。

この集があればこそ、日本民族は貴いと言っていい

し、万葉びとの心、万葉の世は、犬養博士の歌い上げられる節調につれて、すぐそこまで来てくれ、われわれと一緒に呼吸をしてくれるではないか。

貴いことである。

これ以上こころよきことはない。千三百という大変長い時間のへだたりはたちどころに消えて、昭和に生きるわれわれのところまで、ひしひしと迫ってくるのである。

(「万葉のいのち」『陛下側近として五十年』講談社、1986)

入江侍従長は、犬養先生の進講が醸し出す古代・万葉の息吹に渾然一体となっている。入江家(藤原北家御子左庶流)の遠つおやに当たる藤原鎌足の生誕地の大原の里や、乙巳の変にかかわる板蓋宮跡などを、甘樫丘から眺望したので感慨深いものがあつたのだろう。昭和天皇は斉明・天智・天武・持統天皇などの遠つおやを偲ばれた。

私は侍従長のすべての随筆集を読み通した。「鴨ぞ鳴くなる」(『濠端随筆』文藝春秋、1965、中公文庫、1980。再録『めぐる人びと 入江相政随筆選Ⅱ』朝日新聞社、1997)と、「二上山」(『古典逍遙』テレビエス・ブリタニカ、1986)に、『万葉集』にかかわる自分史が記述されている。中学生の終わりのころに『万葉集』に目を開けられ、愛着は「淫する」というべき状態で、東歌と巻11の正述心緒歌に心を強く打たれたという。大正の末年ころには辰巳利文氏に飛鳥を案内してもらっている。犬養先生は昭和元年～3年ころ夏休みに熊本から帰京する折、辰巳氏主宰の夏期臨地講座に参加し、飛鳥など大和の万葉故地を巡っている。ほぼ同じころ2人は辰巳氏を通じて、飛鳥の地で『万葉集』を体得していたのだ。

入江侍従長は旅する時には必ず『万葉集』を携える。大和では二上山を見ると、いつも大津皇子の『懐風藻』辞世詩や大来皇女の弟を思う万葉歌が胸に迫るといふ。行幸のお供で飛鳥を訪れ、甘樫丘に立った折も同様であったと推察する。

《付記》『昭和天皇実録 第十七巻』の昭和54年1月12日の条には、歌会始の召人として「大阪大学名誉教授犬養孝 甲南女子大学教授」が記載されている。『昭和天皇実録 第十八巻』の昭和62年11月4日の条には、文化勲章受章者と文化功労者との「お話及びお茶の席」出席者名の中に、先生の氏名は省略されて記載されていない。

## 編集後記

★明日香村の整備が日々加速され、近鉄飛鳥駅前もまるごと道の駅として観光客のための玄関口となりつつあります。平成から次代へ、明日香村はどのような変容を遂げていくのでしょうか。見守っていきます。